第八十一日目

師　範：満州事変を軍部が勝手に起こし，あとから政府がしぶしぶ認めていく状態の中で，軍部の独走をはばもうとしていた犬養首相を殺害した五・一五事件の首謀者は，軽い刑で処罰されました。

その後，政党政治は終わり，軍人や官僚が首相になって政治を進めました。

国際連盟を脱退し，国際的に孤立した日本は，軍縮条約からも離れ，軍備拡張の宣言をしました。

陸軍の青年将校約１４００名が首相や大臣を襲い，首相官邸や国会や陸軍省や警視庁や新聞社や放送局を襲いました。首相は助かりましたが，大臣ら４名が殺されました。

二・二六事件です。天皇のために立ち上がったのだから，支持されると考えましたが，反乱軍とされ，しずめられました。

事件以後は，ますます軍部の政治への介入が進むようになりました。

１９３６年　二・二六事件がおこる。

この年を覚えましょう。

ペン太：それでは

「二･二六　行くか去ろうか　戦道（いくさみち）」

「いく（か）」は１９，「さろう」は３６です。

師　範：このときすでに戦争への道を走り始めていました。しかし翌年に日中全面戦争が始まるので，二・二六事件の後はまさに戦争への道ということになります。この意味を，よく表しています。

コン太：

ペン太君ので決まりです

ぼくは休みます